

令和6年5月9日

「教育の三つのポリシー」への提言

学校法人太田学園
理事長 太田家和

ディプロマ ポリシー(卒業証書、学位)に関する提言

従来型の卒業単位という画一的概念から脱却して、おのれの大学、短大の独自性、特徴を持たせた卒業学位を持つことが今後重要であり、そこに新たな大学、短大の学位に関する価値と新たな評価基準が生れてくると思われる。これが学生たちの最終就職先である企業側へのアピールにもなり、大学への信頼にも直結する。

正直、現在の卒業証明書、成績表だけでは、企業、受け入れ側はその学生の真の力量を評価できない。その学生の持つパーソナリティや個性までも踏み込んで判断できるものがあると、受け入れ側としては大変ありがたいと感じる。まさにそれは真の「実践的評価基準」に他ならない。

学位は苦労して獲得するからこそ、意味がある。単位を落としても学校側がしっかりとフォローアップできるシステムの構築が非常に重要である。学生の悩み、落ちこぼれを見過ごさない学校側の姿勢や最後まで面倒を見て、最終的に全員をしっかりと卒業させることを学校の本意とすべきである。

卒業証書は、学生にとってエンブレムであり、プライドと自信をもって卒業する証である。よって、卒業証書は、薄っぺらい紙一枚ではなく、学生の意識の高揚にもつながる大切なアイテムとして今一度、扱われるべきである。

また、最終ゴール（卒業）までの過程をしっかりと学生に示すこと（理解させる）が重要である。ゴールが見えなければ、人は頑張れないし、将来のビジョンも持てない。卒業までの道筋を示すことは、学生の先行きの不安を払拭できるものと考える。

カリキュラム ポリシー(教育内容)に関する提言

短大の2年間という短期間で詰め込まれた画一的知識は、正直、現場ではあまり生かせない。単位習得までのスピードアップも求められるし、今の学生にもかなりの負担である。キャンパスライフを楽しむ余裕すらないのが現状と考える。エンジョイできる心の余裕も必要不可欠であり、学制を見直して、余裕

のある3年～4年制も今後は推奨すべきである。

教職は言うまでもなく、専門性が求められるが、想像力やエンターテイメント性も今の時代は重要な能力であり、現在の授業形態である一方向的な教育伝授方式では、これらは取得できない。なぜ、このような能力が必要なのか。それは、子ども達の世界も、エンターテイメントの情報量が増えた分、視覚や聴覚から入る情報に慣れて、より高い次元の情報でなければ、子どもの心が動かされないという傾向が昨今感じられることがある。大人と同じTV番組を見て、音楽を聴いて、子どもの世界と大人の世界との境界があいまいになっているという背景があると考えられる。

では、エンターテイメントの基礎となる自己表現力、指導センス、芸術性などを磨くにはどうしたらいいか。カリキュラムとして新たに位置づけることも必要であろう。例えば、学生たちにミュージカル鑑賞、ライブ鑑賞をさせて、そのパフォーマンスセンスを学ぶ機会を設けたり、授業にテーマ「いかに子供を楽しませるか、飽きさせないようにするか」という題材をを与えて、徹底的に時間をかけて、考えさせる、ディスカッションさせるような授業、また、幼児教育では、様々な行事を体験する事が学びの機会となると考えると、行事＝イベントの企画力も幼稚園教諭の能力として必要である。実践的授業として、「行事・イベント」といった授業があると面白いのではないかと考える。もちろん、従来のイベントとしての学園祭は存在するであろうが、より実践に即したもの、例えば、教室で、子どものためのイベントを企画、開催して、実際に近隣の幼児を招いて、その反応をみる学習など。創意工夫により、今までにない魅惑的な授業はいくらでも考えられるので、型にとらわれないユニークな授業を今後期待したい。

また、昨今の学生（Z世代）は、人間性の教育（礼儀、モラル、コミュニケーション能力など）も、新カリキュラムとして必要かもしれない。ご存知通り、幼稚園は保護者とのコミュニケーションも避けられない職種であるので、対人交渉、話し方やマナーは最低限度必要である。本来、この分野は大学で学ぶべきものではないが、コロナ自粛を経験した世代は、その経験が特に乏しい。残念ながら、昨今の学生気質をみると、ややこの部分が欠如している傾向がみられる。就職後の人間関係で、離職する事例も少ないことを考えると、これが要因のひとつと考えられる。

また、就職後、各企業、各園では、新人研修、社内研修が活発に行われていることを踏まえると、特に時間のかかる分野の強化指導（幼稚園で言えば、ピアノ指導、歌唱指導など）は、大学時代の指導でぜひお願いしたいのが本音である。

アドミッション(求める学生像⇒入りたい大学)ポリシーに関する提言

「千葉経済短大」としての教育メソッドの特徴と独自性を、入学を考えている学生に強くPRすべきである。今やインターネット環境でのSNSの活用が効果的である。今の学生を引きつけるものは何か？今一度考えるべきである。Z世代の若者たちの心をくすぐるものとは？そのためにはZ世代の特徴を捉えなければならない。若者の意識は、今の社会背景を反映して、過去の常識では通用しない時代に突入した

ことを忘れてはならない。

大学側の求める学生像と学生側の入りたい大学が、同じベクトル（方向性）に向かって一致することが望ましいのは言うまでもない。これはキャンパスライフも含めて、学生がこの大学に入学すれば、いかに自分が生き生きと過ごせて、そして楽しいものか、さらに資格を取得できるというイメージをしっかりと植え付けられるかが肝である。輝ける大学生活を具象化、可視化することで、学生によりイメージしやすい雰囲気を与え、入学意欲を高めることにつながると考える。言い換えれば、自分の将来が見える大学とも言えるのではないか。ここで雰囲気というワードをあえて使用したのは、今どきの学生は、型ぐるしいイメージよりも、雰囲気や空気感を大事にする傾向があると考えるからである。

雰囲気や空気感とは、俗に校風といわれるものであろう。校風は、なかなか短期間で一新できるものではないが、新しいコンセプトの下で、時間をかけて蓄積してゆくことが新しい校風へと変貌できると確信している。大学には、是非その努力を惜しまず継続していただきたい。

現代は情報源が氾濫しすぎて、どれが正しいのか、どれが自分の適性に合っているのかも判断できないほどの情報量である。将来の進路に迷っている学生も多いと言われている。こうような時代背景において、大学側はより強いメッセージ性が必要不可欠である。端的に言うならば、学生を導けることができる大学運営が求められる。最後までしっかり面倒を見るという姿勢を学生にPRできれば、そこに安心感が生まれ、大学の求心力はおのずと高まるだろうと考える。まさに時代のキーワードは「フォローアップ」である。

大学は、学生に寄り添い、やる気を起こさせることを、常に念頭に置いて頂きたい。何度も繰り返すが、学生の不安をなくし、安心を与える、ついてゆける自信と決断を芽生えさせることができる大学が、未来の魅力的な大学の姿であるように思える。学生はそれを潜在的に望んでおり、求めているような気がする。最後に……

最近の報道をみても、大学生の不祥事、学校側の不祥事など、残念なニュースが頻繁に飛び込んでくる。これらに共通して感じることは、学校と学生の距離感、隔たりである。学校側に物言わぬ学生（これは学校だけでなく、世間に物言わぬ学生ともいえるが…）と、真摯に学生の面倒をみない、指導しない学校側の体質が起因しているのではないかと思われる。マンネリ化した大学運営にメスを入れて、本来の大学像に立ち戻ることも今の時代は必要かもしれない。

補足になるが、ここでZ世代の特徴を私なりにまとめたので参考にして頂きたい。

- A. デフレ、不安定、不確実性の時代に生まれたこの世代は、安定志向を求める傾向が強い。
- B. この時代の子たちは経済的観念はすでに備わっている。節約志向、贅沢や無駄を嫌い、物質欲がなく、シェアリングすることも全く抵抗がない。

C. 環境問題、社会問題への関心や社会貢献をしたいという気持ちはむしろ強い。その意味では教師という職種への関心は高いはずである。

D.自分らしさを重視する傾向。(多様性は当たり前である)価値観、考え方の相違を受入れることに抵抗感を持たない。では、企業側、就職先がこの考え方(多様性の尊重)がしっかりと確立されているかというと、まだまだ遅れているのが現状である。その意味では就職後、学生もある程度の企業組織に対する耐性を持たないと、精神的にきついと考えられる。

以上、未来に向けての3つの提言を述べさせていただいた。少なからず貴絞の参考になれば嬉しい限りである。